

富山市の中世墓(1) — 堀 I 遺跡 —

はじめに

富山市婦中町堀^{たちでらまち}字立寺町に所在する堀 I 遺跡は、神通川と井田川に挟まれた微高地上（標高約 23m）に立地します。

平成 6 年の試掘調査では、江戸時代の墓から^{ぞうこつき}蔵骨器（骨壺）^{こつぽ}や炭化物・骨片が出土しました。また、平成 7 年の調査では、中世の蔵骨器が密集して埋納された塚状遺構や、中世の^{はいせきぼ}配石墓などを検出しました。



保存整備された塚状遺構

多数の蔵骨器がまとまって出土したのは富山県内でも稀なことから、出土品と共に「堀 I 遺跡とその出土遺物」として、平成 10 年に富山市指定文化財（史跡）に指定されました。

現在、塚状遺構は整備され、現地で当時の人々に思いを馳せることができます。

塚状遺構の概要

塚状遺構は約 9m×約 7m の長方形で、高さは約 1m です。^{れき}礫を多量に含んだもろい土を水平に幾重にも盛って造っています。各斜面には石垣のように礫を積み、その縁には大きめの礫（^{えんせき}縁石）が置かれていました。縁石や盛土の様子から、塚状遺構は何度か盛土して大きくしながら埋葬の場として使われたことがわかります。近世以降には^{いじきみち}石敷道が塚状遺構に取り付けられました。

塚状遺構の盛土内からは、^{もりど}珠洲焼・^{すずやき}八尾焼・^{やつおやき}越前焼・^{えちぜんやき}瀬戸焼・^{せとやき}中世土師器・^{どせいひん}土製品・^{いまりやき}伊万里焼・^{まるやまやき}丸山焼・^{すずり}硯・^{かそうこつへん}火葬骨片が出土しました。遺存状態の良い蔵骨器（珠洲焼・八尾焼・越前焼の^{こつぽ}小壺）の中には火葬骨が納められていました。

蔵骨器 確認された 10 個以上の蔵骨器は、石川県能登産の珠洲焼が 6 個以上、地元の八尾焼が 3 個、福井県の越前焼と愛知県の瀬戸焼は 1 個ずつです。蔵骨器の蓋には珠洲焼・八尾焼の^{すりばち}播鉢が使われていました。珠洲焼の播鉢は^{おろしめ}卸目が擦り減っており、調理具として使っていたものを、蔵骨器の蓋として再利用したものです。珠洲焼は 13 世紀前半～中頃のものが多く、13 世紀後半～14 世紀後半のものが少数あります。

八尾焼は、13 世紀中頃～14 世紀末頃に富山市八尾町^{きょうがみね}京ヶ峰^{かま}の窯で焼かれました。窯から北方約 5km と近い本遺跡では、蔵骨器として多く用いられました。本遺跡で出土した小

壺は珍しく、特殊品として生産されたようです。

埋葬儀礼 中世土師器(皿)は、蔵骨器を塚状遺構に埋葬する際の儀礼に使われました。明かりを灯したり、酒を供えたりして、故人の冥福を祈ったのでしょうか。13世紀中頃から14世紀代のものがあり、14世紀代のものが大半を占めます。中世土師器より古い13世紀前半の珠洲焼の蔵骨器は、長期間にわたって受け継がれた伝世品と考えられます。

配石墓の概要

塚状遺構に隣接して、5基の配石墓を検出しました。人頭大の石で、一辺1~1.6m程度の長方形に区画していました。一区画に1人ずつ埋葬されていたと考えられます。

配石墓は上部が失われ、蔵骨器はすべて破片となって散らばり、周辺からは火葬骨片や中世土師器なども出土しています。もともと配石墓に埋納された蔵骨器や埋葬儀礼に用いられた中世土師器が、近くを流れていた旧河川の氾濫によって壊され、散乱した結果と考えられます。

配石墓は塚状遺構より下の層に築かれており、配石墓が最初の墓として築かれ、その後に塚状遺構が築造されたことがわかります。水害で配石墓が壊れた後に塚状遺構を築き、回収できた蔵骨器を集積したと考えられます。

堀 I 遺跡の意義

婦中町熊野地区の中核的墓地 本遺跡(13世紀中頃~14世紀代)が形成された中世には、熊野神社周辺で多くの集落群が形成されました。本遺跡はそれらのほぼ中央に位置します。中世集落では、集落内の共同墓地に土葬されることが一般的で、婦中町熊野地区の集落群も同様です。これに対し、本遺跡には居住の痕跡がなく、周辺の集落からも離れたところにあります。北陸の中世墓の調査例から、火葬骨を陶器製の蔵骨器に納めて配石墓に埋葬する例は、有力領主層や僧侶などの墓の場合が多く、本遺跡は周辺の中世集落群に居住した有力者層の家族墓と考えられます。本遺跡の調査から、度重なる水害を前に、先祖の墓を必死に守ろうとした当時の人々の姿を垣間見ることができます。



有力者層の家族墓(配石墓)

参考文献 『富山県婦中町堀 I 遺跡発掘調査報告』 婦中町教育委員会 1996年